

## 事例紹介

かみかわせい

秋田県大館市立 **上川沿小学校**

# テスト前ドリルで反復学習！

## ～一斉学習でテスト範囲を「焦点化」～

「学力日本一」として知られる秋田県にある大館市立上川沿小学校では、単元テストの前の1時間で学習内容の確認と基礎基本の定着を目的としてeライブラリのドリルを活用しています。

### 授業 単元テスト前にドリルで確認

#### ★ ★ プリント→動画→ドリルでしっかり復習！

6年生理科「ものの燃え方」のまとめの授業では翌日のテスト対策として、先生から単元の要点を解説後、プリント→動画視聴→ドリルの順で復習しました。

プリントで『書く』というアナログの部分も大事にしつつ、その後はタブレットPCを使って関連動画を視聴し、子どもたちの関心を高めます。プリントと動画でしっかり復習した後はドリル問題に挑戦です。子どもたちは**基礎問題から発展問題まで、リトライで100点を取れるまで粘り強く**取り組んでいました。



▲ 動画が終わったらeライブラリにログインします

#### ★ ★ 一斉学習機能を使って「焦点化」

今回の授業では『一斉学習』機能を使って、先生が時間と単元を指定してドリル問題を行いました。

『一斉学習』を使うことで、**学習内容を焦点化**し、子どもたちが教科や単元を選んだり、他の内容を見ってしまうなどの**時間を省き、少しでも多くドリル学習に充てる**ことができます。

子どもたちは大好きなタブレットで学習できる嬉しさもあり、先生から指定された問題に集中して取り組んでいました。



#### ★ ★ 学習状況を確認して個別フォロー

先生は子どもたちのドリル学習状況をモニターで確認します。**クラス全体の進捗や点数が一覧で表示される**ため、点数が低く遅れがちな子どもには個別フォローを行い、進捗が速い子どもには「頑張っているね！」と声を掛けていました。

「**つまりしている子どもだけでなく頑張っている子どもへの声掛けも大事です**」と富沢先生。学習履歴を一覧にして印刷し、子どもたちの頑張りや進捗を担当の先生に報告して成績の指標にすることもあるそうです。



★ ★ eライブラリで主体性が伸びる！

「次期学習指導要領の大きなテーマとして『アクティブ・ラーニング』がありますが、それには一番に**自ら動く**という**主体性が必要**です。eライブラリは一度使い方を覚えると、次からは**子どもが自分に合った学習を自分で選んでチャレンジ**できるので、**主体性が伸ばせる**と考えています」と富沢先生。

子どもたちからも「ドリルの勉強が楽しい!」「もっとドリルをやりたい!」と、多くの前向きな声が上がっていました。



★ ★ 苦手な文章題も諦めない!

子どもたちにとって文章題は苦手傾向にあり、「文章を読む」ということが課題となっています。

しかし、eライブラリのドリルでは問題文が長くても、子どもたちは**丸をもらいたい**という気持ちから、**最後まで問題文をしっかりと読んで取り組んでいる**そうです。

「eライブラリは**楽しみながら**できますが、**実はその中で子どもたちはすごく考えています**」と富沢先生。楽しく学習をしながら、自然と文章を読む力や考える力も身につけているそうです。



運用 縦割りで教わるeライブラリ

★ ★ 6年生が1、2年生に使い方を教える

昨年度末にタブレットPCの使い方をマスターした6年生が、低学年の子どもたちにタブレットPCとeライブラリの使い方を教える縦割りの学習会を実施しました。

「**手出しをするのではなく、手を添える!**」という指導のもと、6年生は低学年の子どもたちにやさしく使い方を教え、ドリル学習を見守りました。

とても和やかな雰囲気の中、教える6年生も教わる1、2年生もとても嬉しそうにしていました。学年を超えた教え合い・助け合いの姿が見られ、先生方からも大変好評だったそうです。



情報担当 富沢 章彦 先生のお話

eライブラリは単元のまとめで基礎基本の補充と、個に合わせた学習を行うために活用しています。得意・不得意は子どもによってそれぞれですが、**同じ時間の中で個に応じた知識を身につけ、発展的な問題にも対応していけるのが良いところ**だと思います。

今後は**ダウンロード学習機能**という新しい活用の幅ができたので、それを活用するために、**タブレットPCを持ち出すメリットと学習をどう結びつけていくか**考えなければなりません。**タブレットPCを使うことは目的ではなく手段**なので、効果的な活用をし、**先生方の負担軽減と子どもたちの個に応じた学習に役立てていきたい**と考えています。タブレットPCを、子どもたちにとって特別なものではなく、**当たり前なものにしていきたい**と思います。



富沢 章彦先生